

～昨日の風 明日の風～
**経営コンサルタント
 独白録**

[第139回] あれから5年…



戸敷 進一

1956年生まれ、宮崎県出身の経営コンサルタントで、佛経営改善支援センター（福岡市、URL: <https://sien.co.jp/>）代表取締役。業種を問わない「組織活性化」の専門家で、全国300社以上の企業の活性化を指導。全国の商工会議所や企業などからの依頼で講演活動もおこなう。明確で分かりやすい表現で驚くほど短期間で「組織」を変えるのが強み。また、帝国データバンクの契約コンサルタントとして九州各地の企業を中心に多くの実績を上げている。

「3月11日」と言えば、日本では東日本大震災の事です。しかしながら、世界的なスケールで考えると2020年3月11日に世界保健機関（WHO）が【パンデミック宣言】を発した日でもあります。そして2025年5月5日に3年3ヶ月ぶりに非常事態宣言が解除されました。以来2年ほどが経ちなんとなく以前の世界に戻ってきたような気がしています。そしてあの過酷な3年余りの社会や生活の有り様を忘れてしまいました。

街から人影が消え、多くの店舗が営業できず、子供たちは学校に通えませんでした。特に中学3年間、高校3年間でパンデミックの中で過ごした世代は、部活も遠足も修学旅行も文化祭も規制されました。マスクを着用することがほぼ強制され、テレワークやリモート授業と言う形で人との接触が制限されました。メディアはこれでもか、これでもかとコロナの恐怖を煽り、私たちは本来の社会生活を送ることが困難で、同時に多くの企業も生き残りに必死でした。

急速な情報密度の向上

人と人との接触が失われ、一時期は人々の気持ちの内側に向かっていました。ところが、リモートワークやリモート授業の必要性から、各家庭や個人レベルで情報通信機器の拡大が図られました。国のコロナ対策給付金10万円の使用先では、子供たちを始めとするタブレットの消費が圧倒的に多かったのです。今は懐かしい東京都知事の「密閉」「密集」「密接」という三密メッセージや都庁ビルや大阪通天閣のライトアップなどの中で多くの人達は様々な方法で情報を必要としました。結果的にコロナの期間中に世代を超えて地域を超えて情報が溢れ返り、良い意味での情報化が進んだ3年間でもありました。

価値観の多様化の促進

テレビや新聞が力を失ってくるきっかけは、まさにこの3年間の社会変化の中にあっただけではないかと考えます。誰もがスマートフォンやタブレットで様々な情報に触れる機会を得て、個人の

意識や行動が変化したと思います。そしてそれは価値観の多様化の促進でもありました。

国や自治体や企業の対応などがリアルに届けられることにより、保守的な考え方やリベラルな考え方が交錯し、SNSと言う新しいタイプの情報ツールを獲得することにより、人々はより深く物事を考えるようになりました。

ホワイト社会と昭和の終わり

ホワイト社会とは、行動や発言が清く美しく、汚れなき漂白された「見た目がきれいな社会」を指す言葉です。どうやらパンデミックの3年間を通して、社会はそうした方向へ向かったのではないかというのが実感です。世界的には否定され始めましたが、LG BT やSDGsなどと言う言葉が飛び交い、政治と金、芸能人のスキャンダル、不倫、パワハラ、セクハラなど以前ならば影に隠れたり、肩をすくめるだけで済んだような出来事が、致命的な結果を呼び込む世の中になってしまいました。ある意味【昭和的なもの】が否定される時代となりました。

真の意味の意識改革

経営の場においてもそうした変化を無視するわけにはいきません。働き方改革だけではなく、自社の風土をどれだけ時代に合わせられるかは、経営の上で最も重要な事柄となりました。なぜならば、そうした対応ができなければ採用で苦勞します。採用で苦勞するだけではなく現在所属している社員が逃げ出します。意識の高い経営者もたくさん知っていますが、まだまだそうした変化に気づかない方々も間違いなく存在します。良い意味での昭和的と、時代にそぐわない昭和的を峻別する高い理性が求められる時代です。

既に時代は、次のステージを迎えています。19世紀末を思わせるようなダイナミックな世界の動きを見ておかないと、経営の方向や社会の動きを見失ってしまいます。自らの羅針盤をどのように定めるかが経営者と経営幹部の役割となりました。